

No. 95

1992.12.8.

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

京都支部第1回研究発表会記録号

目 次

京都橘女子大学における「ミニ展示」（小林倫道） 2頁

NACSIS-IR による文献目録の作成（竹本文夫） 5頁

立命館大学におけるリサーチライブラリー構想（山本修司） 8頁

立命館大学学術情報システム I L L サブシステムについて（松原修） 10頁

大学図書館の自己評価（篠原俊夫） 14頁

今号は、さる10月24日に開催された、従来とは全く異なる実践研究発表中心の第15回京都支部総会における研究報告を、発表者自身に詳しく執筆していただいてお届けします。

京都橘女子大学における「ミニ展示」

—図書館空間の創造的利用—

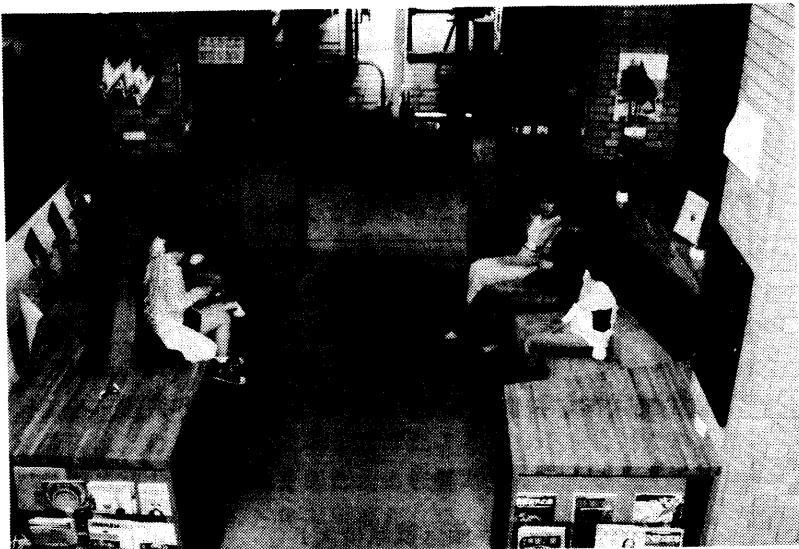
京都橘女子大学図書館 小林倫道

支部総会では本学図書館で企画された展示会について発表させて頂きましたが、報告者が不慣れであったことも相俟って、非常に端折った報告になってしまいました。従って本稿では、少しでも本学図書館での展示会のイメージが伝わることを念頭において書き進めたいと思います。

本学図書館で初めて、まがりなりにも展示と呼べるディスプレイが出現したのが、1986年の新図書館開館から1年余り後、祇園祭の話題が人口にのぼる頃でした。ほんの思いつきから始まった「祇園祭展」は、『祇園祭山鉾絵図』（1基づつ山鉾を描いたパネルが20数点セットになっている）を柱という柱に吊しただけの手軽なものでした。手軽な割には、出来上がってみると館内の雰囲気ががらっと変わるものに驚いたものです。ある先生のリクエストでこの「祇園祭展」は、祭の時期に合わせて毎年開催しています。その先生が言われた「図書館は、京都で今何が起こっているか、それ位の事は分かるくらいにいつも情報を発信していなければならない」という言葉は、今でも印象に残っています。

その年の秋と2年後の秋に、いわば学内のトピックを記念する形で展示会が行なわれましたが、これは会場も図書館外の場所で「ミニ展示」と比較すれば「大展示」とでも言うべき（といってもたかが知れていますが）範疇に入るので、本稿からは除外します。

さて、「大展示」の狭間にあって大っぴらには予算を獲得することができない「ミニ展示」。すべてが手弁当で、しかも日常業務に追われているという苦しい現実の中から生まれたコンセプトは



図書館のメインストリート、ブラウジング・コーナー
(柱を使って美術同好会の作品展を開催中)

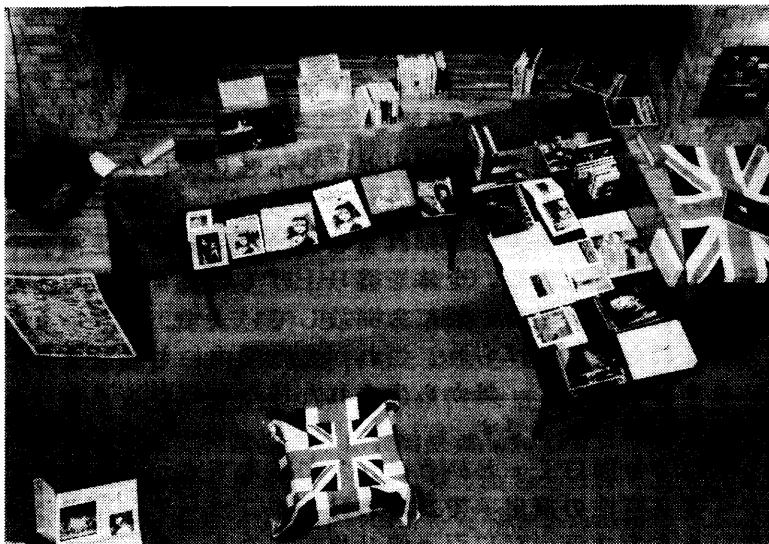
- ① 展示スペースがない → 図書館内空間の利用

② 予算がない → 無いソデでも振りようで振れる

③ 労力がない → 助つ人の動員、人のフンドシ

の3点に尽きます。全く、無から有を生み出す苦しみは、軽じて計り知れない喜びでもあります。

まず①。実はこれだけは恵まれています。本学図書館には洒落たブラウジング・コーナーがメインフロアのド真ん中にありますが、設計者の趣味が生かされて大変イキな空間となっています。ここを「祇園祭展」の時以上にショーアップしようという事を考えました（実はピアノの演奏会や落語をやろうという突飛な案まであり、今だに夢は捨てていません）。展示物の他には看板を作ったり吹抜に物をつるしたりといった演出がまず雰囲気を出すのに不可欠。照明は消耗品費からひねりだして照明用の電球を購入しておいたのが毎回役に立っています。図書館の中でやることがかえって「ここホントに図書館？」と思わせて増幅効果を生んでいます。



図書のディスプレイ（「ブリテン・トゥデイ」展）

マを持った統一体として編成すれば、また違って見えるものです。日頃ほとんど開かれないのである本を発掘してきていちばん面白そうなところを開けておくのもテクニックのひとつ。これは中々効果があります。また、AVセンターの機材とソフトを出張させて関連ビデオやオーディオのコーナーを設けるのも常套手段です。活字とAVの両方から訴えるわけです。

③がわが「ミニ展示」の白眉であります。まず学生の動員。ほとんどの場合、展示内容と深い関わりを持つ教員がいるので、作業労働力としてその受講生やゼミ生等を募ります。これは学生にとっても授業で学べないことが学べるのでうま味があります。直接関係のない有志が興味だけで来てくれることもあります。また図書館主催でない、講義成果の発表という趣旨から持ち上がったような企画も沢山あるので、この時は学生が主体的に動きます。クラブ・サークルに場所を提供する時も同様で、この

本学には余った金もなければ人様にお見せするようなお宝もない。そこで②見せ方の工夫。同じ書店でも並べ方を変えればずいぶん雰囲気も変わる。それどころか売れ行きまで変わる、ということに一消費者として気が付けば、こいつを図書館にも応用してあとは図書館員の盛付け次第。「ミニ展示」には展示テーマと関連する図書のコーナーを必ず併設します。個々の本は詰まらないものでも、何かひとつのテー

様に図書館が催物スペースとして定着してきたことは有難い限りです。「人のフンドシ」は学外にも波及しています。図書館側の「展示ラインナップの増強」と業者側の「女子大生にPRする機会」という利益が一致し、たまたまテーマがぴったりだった事から昨年の「アレンジ源氏展」では、香木の老舗と清水焼の窯元と図書館とが絶妙のジョイントを実現したのでした。

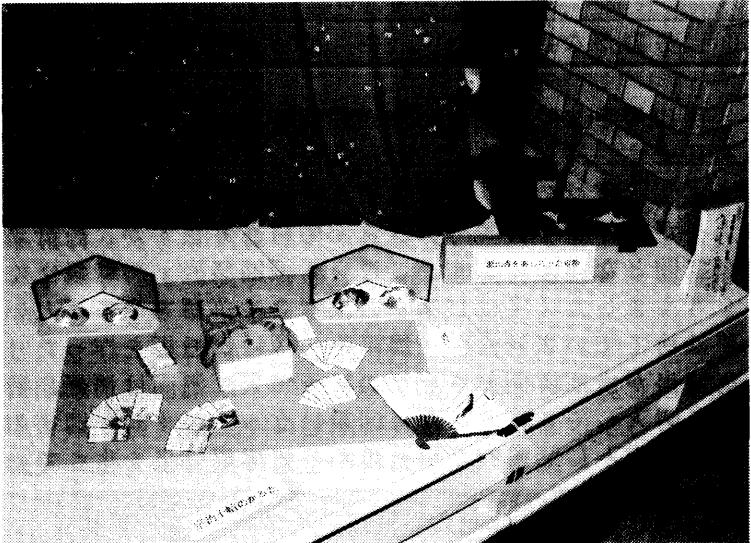
物さえ集まれば、あとはケースに入れる数少ない「それらしい」メイン展示物とでトータルにコ

ーディネイトしていきます。出来上がった会場では学生がぐるっと見物して、ソファーに座って「図書コーナー」から持ってきた本をバラバラめくる。「展示会」というより「フェアー」「まつり」といったイメージかも知れません。展示に加え講演会や茶話会、関連ビデオ上映会等も並行して企画し、全体を盛り上げています。もちろん展示と合わせてこれらの催しはほとんどの場合一般にも開放しています。そういうこともあってか、しばしばマスコミにも取り上げられ、これがまた学内にも刺激を与えるという相乗効果を生んでいます。まったく、無から生まれた様なものがここまでふくらんでいくとは、畏れ多いやら有難い限りです。

限られた資源でとにかく「少しでも面白く」というのが常に基本です。そのことに欠くべからざるテクニックが「非日常性の演出」であるわけです。コーナーをガラッと模様替えする、いつも影にいる本をステージに引っ張り出してやる、色んな人がそれにたずさわってくる、とにかくいつもと違うものを見せる、新しい発見をさせることが「面白さ」の源になるわけです。

発見をするのは展示を見て帰った学生や一般の人だけではありません。手伝ってくれた学生は大学生活にかけがえのない思い出を刻み、図書館員の側にも腹いっぱい楽しんだ充実感と、沢山の「金で買えない」成果が残ります。「展示会」というと大それていて、とても手が出しにくいと思われるかも知れません。実は本学の一連の「ミニ展示」には名演出家がいます。彼の言葉を締め括りに。

——「例えば自動車を作るのに、『車にはエンジンがあってギアがあってタイヤがあってここにハンドルがあって……。チエッ、部品が足りないから作るのやめた』なあんて常識でしばられるよりも、『ある物みんな持ち寄ったら何とか車の形にはなったけど、やっぱり動かないからみんなで押していくこう』ってやった方が、はるかに面白いし得るものも大きいのさ。」—— 了



業者共催コーナー（貝合せ。「アレンジ源氏」展）

NACSIS-IRによる文献目録の作成

同志社大学人文科学研究所 竹本文夫

はじめに

データベース検索の成否はいかにして適正な検索語を見つけるかにかかっている。適正な言葉で検索すればデータがあれば一応の結果が表示される。しかし、その結果が不十分な場合がしばしばある。検索は結果が必要にして十分なデータかどうか必ずチェックしなければならない。以下は私の検索経験と感想の報告である。なお、当日時間の関係で端折ったところは若干補強してこの稿をまとめた。

[I] JAPAN MARK の検索事例 「万葉集と古代朝鮮語」

万葉集は古代朝鮮語を基本にして書かれているという主張があり、李寧熙（イヨンヒ）という朝鮮の学者が『もう一つの万葉集』という本を1989年に文藝春秋社から出版しベストセラーになった。それに対し国文学会を中心に反発というか拒絶反応が出され、黙殺され、現在に至っている。李寧熙はその後続々と研究成果を出版している。私はそれらを読み大いに共感し、もっとそうした論文を読もうと思い、NACSISで検索してみた。

まず素朴に「万葉集」と「朝鮮語」の両方を含む図書を「目録所在情報（和図書）データベース」で「P @MANNYOUSYUU @TYOUSENGO」として検索してみた。

※ "P"はPHRASEの略で A,B,C, . . . をすべて共通して含むデータを検索せよ
といいうコマンド。 "@"は以下のローマ字を片仮名に変換せよという指示。

検索結果は驚いたことにたったの2件しかなかった。『朝鮮語で「万葉集」は解読できない』（安本美展）とその新版である。考えてみれば必ずしも書名中に「朝鮮語」や「万葉集」という言葉を含むとは限らない。

そこで国会図書館のJAPAN MARKで今度は件名で検索すべく漢字形で「P 万葉集 朝鮮語」と入れて検索してみた。結果はなんとゼロ！もう一度先の検索結果『朝鮮語で「万葉集」は解読できない』をよく見てみるとつけられている件名は「万葉集」のみ。つまり対象が万葉集であればどのような分野からの研究であっても「万葉集」としか件名は付けない、ということらしい。

次は前述の著者、李寧熙（イヨンヒ）で検索してみた。「A @I @YONHI」とすると7件ヒットした。データを読んでみると件名は万葉集、日本語、天武天皇、持統天皇、朝鮮語など（細目は省略）。

そこで次は「P 朝鮮* 日本*」と件名（漢字形）の前方一致で検索。1264件ヒット。これでは多すぎる。中身を見る迄もなく関係のないものが入りすぎている。

次はもう少し絞って「P 朝鮮語 日本*」と組み合わせてみた。22件ヒット。こういう件名で検索したから当然万葉集以外のものも入っている。しかし、『ヤマト言葉の起源と古代朝鮮語』とか『記紀万葉の朝鮮語』など興味深い本が発見できた。そして古代朝鮮語と日本語の関係、特に記紀万葉との関係についての本を幾つか書いている著者を知ることができた。

※「朝鮮*」は前方一致といって「朝鮮」および「朝鮮何々」をすべて探せという指示。

この検索で知りえた著者名で検索したところさらに新しい著作を幾つか発見した。な

かなか完全には拾ってこない。やむをえず「万葉集」だけで検索。1060件。だが著者で検索した際に拾った良い資料がかなり落ちている。

結局より多くの資料を見つけようとするなら、面倒だが「P 朝鮮* 日本*」の1264件と「P 万葉集」1060件を丁寧に見て拾っていくより方法がないのだろうか。何かもっと能率的な検索方法があるはずだと思うのだが・・・。

[II] LC MARK の検索事例 「カナダの移民に関する洋書文献」

この4月に人文研の教員から「移民に関する最近の洋書文献目録を作りたい。何か良い方法はないか」と相談された。さっそくNACSIS-IR のLC MARK で検索した。

まず初めに「P IMMIGRATION」でやってみたところ5000件をこえるヒット。この件数を見て研究者と相談。IMMIGRATIONだけの検索では多すぎる、直接の研究課題であるカナダの移民に絞ろう、しかし、余分なものは入ってもやむを得ないが必要なものは落ちないようにする、英語文献は網羅、その他の言語も主要なものは出来るだけ拾いたい。

そこで次のような検索を行なった。

① P IMMIGRATION CANADA 314件

これでは文献数が少なすぎておかしいと研究者が言う。そこで語尾変化のことを考え2語とも前方一致検索にした。これだけの変化で180件ほど増えた。即ち

② P IMMIGR* CANAD* 491件

研究者は横にいてヒット数が増えるのを見、EMMIGRATIONも追加してくれという。

③ S EMMIGR*, IMMIGR*.AND. CANAD* 531件

今回は EMMIGR*と IMMIGR*のどちらか一方だけでも含み且つ共通してCANAD*を含むものを探す検索。以下次々と検索を繰り返し、最終的には以下のようない検索になった。

④ S ALIEN*, ASSIMILA*, EMMIGR*, ETHNIC*, IMMIGR*, MIGR*, MINOR*.AND. CANAD* 958件

※ "S"はSEARCHの略でA, B, C, ... の何れかを含むものを検索せよという指示。つづけて ".AND. D" とするとそれらの何れかを含み且つ共通して D を含むものを検索せよという指示。

[III] JAPAN MARKとLC MARK

国会図書館のJAPAN MARKとアメリカのLC MARKを比較してみると記述、検索語ともはるかにLC MARKが優れている。特に主題で検索するという立場からみると件名の与え方がLCは抜群に良く、検索効率が高い。

研究発表会では時間の関係で触れなかったが、この誌上では「パソコン通信」の例を少しあげて説明したい。JAPAN MARKでは「パソコン通信」という件名はなく、もっとずっと広い意味の「データ伝送」という件名しかない。しかし、「データ伝送」で検索するとソフト、ハードあらゆるものを含んでおり、先の万葉集の例と同じ位の数(917件)になってしまう。

LCでは"MICROCOMPUTER" "COMPUTER NETWORK"といった件名がある。さらにMICROCOMPUTERの場合限定語を付けて細分化している。"MICROCOMPUTER(PC)"など。それらと書名中に現われやすいキーワードを組み合わせるとかなり効率的な検索ができる。同じパソコン通信の検索でもLCの場合「S COMMUNICATION, NETWORK .AND. MICROCOMPUTER」で検

索すると90件ヒットする。他の文献目録と比較してみると主要なものはこれで殆ど拾っている。

最初に触れた「万葉集と古代朝鮮語」の場合 「S 万葉*, 古事記, 日本書記 .AND. 朝鮮*」として検索しても 7件しかヒットしない。JAPAN MARKは件名の付け方がよくないからであろう、うまく検索できない。

LCは記述も注記などかなり丁寧に情報が入力されている。教員が自分の持っている本のLC書誌情報を見て「こんなことが載っているのか」と気付く例さえある。とにかくLCの詳細書誌情報を見ればかなりのことが分かるのでLC MARK から作った文献目録は教員に重宝がられている。

「せっかくデータベースを構築する以上ぜひ質の良いデータを入れてほしいものだ」というのが利用者としての実感である。

最後に私の体験からまとめてみた検索手順を参考に書いておきます。

【付 検索手順】

①まず適当に思いつく検索語で試行検索

②検索結果を読む

△どんな書名があるか

△論文の多い著者がいるか

△分類はどうなっているか

△どんな件名が付いているか

△その他どんな検索語があるか

③チェックのための検索

△検索語を追加または修正して検索

△論文の多い著者名で検索

△その主題の分類で検索

それらの検索結果を相互に比較検討

④参考図書の利用

△分類表の相關索引

△件名標目表

△その分野の文献目録

△有力研究者の探索

分類の相關索引や件名標目録は検索語の宝庫であり参考になる。特に件名標目表は

「を見よ」参照、「をも見よ」参照が豊富に入っているので非常に参考になる

⑤検索語の決定

検索結果の比較検討と参考図書による調査ののち検索語を決定

⑥検索結果（網羅度）のチェック

知っている文献が入っているかどうか依頼者（研究者）と共同でチェック。

依頼者がよく知らなければ参考図書などでチェック。

⑦漏れがあれば再検討し、検索語を修正又は追加して再検索。必要に応じ繰り返す。

立命館大学における リサーチライブラリー構想

立命館大学共同研究事務室 山本修司

1、問題の背景

研究活動が高度化し、学際化・細分化・総合化が進む中で、「図書館」に求められる領域は飛躍的に拡大し、かつ高度化してきている。また、情報提供メディアの多様化は、新たな検索支援の機能を図書館に求めるし、研究者の「玄関口」まで学術情報が接近していく中で、必然的な傾向としての自前のデータベース構築の動きに対する支援も重要な課題となりつつある。

立命館大学では、第3次長期計画という、学園の総合計画の取り組みの中で、研究関連分野については、社系4学部（法、経、営、産）の書庫を共同化し、基礎文献資料室、雑誌書庫と相まって4学部の蔵書の共通排架、管理と雑誌バックナンバーの集中と一本化、年刊類の系統的収集と管理を実現させた。

同時に事務体制上では研究所事務室、研究事務課、共同研究事務室の3課による研究部を発足させてきた。共同研究事務室については、法・経・営・産・国際共研、文学部文献資料室、基礎文献資料室が組織的に一本化されている。

また89年からの本学学術情報システム（RUNNERS）稼働後、図書業務は大きく変化し、図書関連業務の集中化と一元管理への展望、資料収集・提供という、いわば入口・出口への力のシフトの可能性を現実のものにしつつある。

この間、全学的データベースサービスが実現したこともあり、学部学生の利用が増加してきているし、書庫の共同化の当然の帰結として、教員の学部をまたがる蔵書利用が増加している。同時に、急速に増加しつつある留学生や大学院生へのサービスのあり方も課題となっており、利用者の増加と層の多様化への対応の面からも、新しい体制が求められている。

2、リサーチライブラリー構想の概要

この間、研究部内に検討プロジェクトを設置し、リサーチライブラリー構想の検討を行ってきた。その発想の最も基本的な枠組みとして、全学的総合化・開放化の志向があげられる。いわば、資料配置や図書行政を全学的に総合化し、それを背景に持ちつつ利用対象に応じた窓口を設定するという大きな枠組みを提起している。

そのような考え方を長期的に志向しつつ、当面の中長期的課題としての社会科学系図書館的構想がリサーチライブラリー構想である。具体的には、従来の共同研究室機能の再編と、図書業務の集中化を行いつつ、「当面は、新たに修学館共同書庫に収蔵が提起されている政策科学部の資料、さらには人文科学研究所の持つ共通資料部分も含みこんだ、社系資料の総合的センターとして出発する」ことを提起している。

現在の検討内容を紹介すると、まず、リサーチライブラリーとして実現すべきサービス内容を、①資料の収集（各部局における計画的収書の一層の充実と併せて、基礎資料部分についての独自の収集、維持）、②資料管理・維持（継続物、逐次刊行物についての統一

的継続管理の実現、製本業務の1元化によるバックナンバー管理の強化）、③資料閲覧、レンファレンス（閲覧スペースの充実と、閲覧機能の強化）、④情報検索、提供：各種機器の整備を含む、外部データベース、電子出版等に対する検索機能の強化、サービスの強化）、という、大きく4点に整理している。

更にとりわけ強化すべき機能として、①研究庶務的機能の強化（コピーサービス、資料の代行検索機能等）、②収書、出版情報の利用者への迅速かつ正確な提供、③コンテンツサービス、SDIサービス（選択的情報提供）を含む個別対応的サービスの強化、④様々な情報機器の操作補助、外部データベースの検索補助等の技術的サポートの強化、⑤以上の機能強化を通じて、情報化の進展に伴い当然に予想されるパーソナルライブラリー（あるいはパーソナルデータベース）構築への支援機能の強化、⑥関連して、独自のデータベース構築（本学の特色ある収書の社会的打ち出し、共同研究活動に関わる専門分野データベースなど）、本学研究者の研究成果のデータベース構築の課題、⑦日常的な教員の研究情報の把握と、図書館活動への反映、といった諸点をあげて整理している。

3、今後の検討課題

リサーチライブラリー構想の論議はまだ始まったばかりであり、今後全学的にも論議が更に深められなければならない。同時に、更に政策的に検討すべき課題としては以下のような点が考えられる。

まず、現在の財政、予算構造について、各学部の収書の独自性を尊重しつつも、さらに統一的運用と集中的執行を可能にする構造を検討しなければならない。

次に、リサーチライブラリーとしての意志決定のあり方をめぐっての機構的整備、さらには全額の図書行政についての運営機構の整理を行う必要がある。当然それに伴って、事務機構の再編課題も検討課題となる。

リサーチライブラリーとしての施設条件の整備のうえでは、今後の更なる情報化の進展に対応しうる情報基盤の整備の問題、書庫スペースの問題、閲覧スペースの充実などを、衣笠キャンパスの再編整備の進行の中で具体化していく必要がある。

もうひとつ重要なのが、そういった新たな体制や課題に対応しうる職員の力量の向上の課題であり、力量向上に向けた政策の検討が求められる。その柱の1つは図書館的業務力量の向上の問題であり、もう1つは研究マネジメント部門の職員としての力量養成と人事政策の展開の問題であろう。

—以上—

立命館大学学術情報システム ILLサブシステムについて

立命館大学図書館情報システム課 松原修

1. ILLサブシステムの開発の目的

学術情報センターがサービスする ILLシステムは、仮想画面上の図書館間文献複写・貸借データを各参加館に於いて処理することによって実現されるものである。

しかし、この処理はあくまで学術情報センターを通じての対参加館とのデータのやりとりのみであって、文献複写・貸借の依頼・受付後の処理、学内での金額精算、学術情報センターがサービスする機能を利用しない（できない）依頼・受付処理などが必要であり、ローカルシステムとしての ILLサブシステムを開発することになった。

そして、さらに ILLデータベースを構築することによって、きめ細かな統計も取ることも可能になる。

また、近々稼働するであろうNACSIS-IRからの ILL申し込みにも対応できるようにシステムに拡張性を持たせているのも大きな特徴である。

2. サブシステムの対象範囲

- (1) 学術情報センター ILLシステムからの ILL用ローカルDB作成
- (2) 学術情報センター ILLシステムを通さない ILLローカル処理
- (3) ILLローカルDBの検索
- (4) ローカル参加組織DBの登録、更新、参照機能
- (5) 依頼受付状況リストの作成
- (6) 受付・依頼処理票の作成
- (7) 統計リスト出力機能

3. 機能概要

(1) 依頼処理

① 依頼

学情センターの ILLシステムを通さない依頼処理でローカルDBを構築する機能である。（学情センターを通しての依頼については、ローカルDBに自動ダウンロードされ

る)

必要項目を入力後、参加組織DBにより該当項目をセットし、その表示形をセットし、レコード番号の自動採番を行う。ここで自動採番されたレコード番号は後の処理での呼び出しキーとなる。

②到着、会計、返送

依頼済のデータに対して到着、会計、返送処理を行う。

依頼処理時に自動採番されたレコード番号で呼び出し、依頼処理時に入力できなかった数量、単価、日付等を入力する。

③書誌内容入力

依頼・受付のすべての画面から展開が可能であり、書誌・所蔵・論題等の情報の入力を行う。

(2) 受付処理

①受付

学情センターのILLシステムを通さない受付処理でローカルDBを構築する機能である。（学情センターを通しての依頼については、ローカルDBに自動ダウンロードされる）

必要項目を入力後、参加組織DBにより該当項目をセットし、その表示形をセットし、レコード番号の自動採番を行う。ここで自動採番されたレコード番号は後の処理での呼び出しキーとなる。

②受付、会計、発送

受付済のデータに対して会計、発送処理を行う。

受付処理時に自動採番されたレコード番号で呼び出し、受付処理時に入力できなかった数量、単価、日付等を入力する。

③返送受領

会計、発送済の貸借データに対して返送受領を行う。

受付処理時に自動採番されたレコード番号で呼び出し、会計・発送済のデータに対して金額、日付等の項目を入力する。また、この時、状態コードはシステムで自動的に「返送受領」にする。

(3) ILLDBメンテナンス

レコード番号と処理区分を入力することにより ILLレコードを呼び出し、データの修正、削除を行う。

(4) 参加組織DBメンテナンス

参加組織略称と処理区分を入力することにより参加組織レコードを呼び出し、データの登録、修正、削除を行う。

参加組織DBには、住所、機関種別、徴収猶予番号、請求方法、支払方法などの項目がある。

(5) 受付処理票作成

学情センターのILLシステムからダウンロードされたデータより、受付処理票を作成する機能で、抽出区分は、学情ID、取り込み日付等である。

この帳票は、半分が台帳の役割、半分が依頼館への返送用の送付状の役割となっている。

(6) 依頼処理票作成

学情センターのILLシステムからダウンロードされたデータより、依頼処理票を作成する。(1993年4月リリース予定)

この帳票は、NACIS-IRからの申し込みに対応するもので(申込書がないため)、半分が台帳の役割、半分が受付館への依頼状の役割となっている。

(7) 処理状況リスト作成

すべてのILLデータを対象に処理段階別にリストを出力する機能で、抽出条件は、複写依頼種別、処理段階、日付等である。

(8) 部局・個人別ILL使用額一覧表作成

抽出区分は、期間と支払区分で、部局別・個人別にILLの使用額の一覧表を作成する。

(9) 各種統計表作成

- ①相互利用統計表
- ②部局別申込者別依頼受付件数一覧表
- ③館種別依頼受付件数一覧表
- ④館別依頼受付件数一覧表
- ⑤文献複写納入実績表

(10) ILLデータベースの検索(1993年4月リリース予定)

ILLデータベースを検索する機能で、検索項目は、依頼・受付区分、レコードID、期間、相手館、依頼番号、依頼者名である。

4. 問題点と今後の課題

問題点としては、依頼・受付ともNACSIS-ILLを通さない件数が多く、ローカルDBを構築するのに手間がかかっていることが、まずあげられる。

また、学情センターのILLを通じた場合とローカル処理でDBを構築した場合では、番号体系がことなるため、現在過渡的に台帳を残しており、DBと台帳の2重管理を行っている。

そこでこれらの問題点を解決するために、書誌情報の入力ができるだけ簡略化したり、DB検索機能によって台帳を無くす方向で対応しで行きたい。

大学図書館の自己評価： あるアメリカの中規模大学図書館の事例から

篠原俊夫

1.はじめに

大学における自己評価をめぐる論議は、1970年代後半には既に開始されたと考えられている。例えば、私立大学連盟の「私立大学の相互協力と自己点検」（1977年10月）や大学規準協会の「大学の自己評価に関する中間報告」（1981年12月）に、その先駆的な動きが見られるという。従って、控えめに見ても、10年以上も大学関係者の意識の底には、自己評価は、避けて通れぬ課題として存在していたと考えられる。それが現在、全ての大学において、緊急の課題として、取り組まれるに至ったのは、言うまでもなく、1991年7月の大学設置規準の改正によって、自己点検・評価が設置の際の必要な最低の規準とされたことに直接の原因がある。

大学の自己点検・評価は、当然、教育・研究分野に重点が置かれるが、管理運営分野に関する自己点検・評価を欠いては、トータルな大学の評価とはならない。中でも大学図書館の水準は、そのまま大学における教育・研究の水準を規定すると言ってもよく、その意味では、大学図書館の自己点検・評価は、教育・研究の自己評価に劣らず重要で、緊急を要する課題である。ところで、日米両国の大学の教育・研究や図書館サービスに関する評価に関する限り、歴史的に見て、米国の先進性には、遠く及ばないと考えるのが常識だろう。大学図書館の管理者は、予算獲得のために、プロフェショナル・ライブラリアンは、ステイタスの維持とプロモーションのために、自己評価を欠くことのできないものとしてきた。オリエンテーションやビブリオグラフィック・インストラクションは、専門職の図書館員に教員と同等の待遇を要求する直接の根拠となったものであるが、決して平穏に他分野の教員や大学の管理者達に認められたわけではない。図書館員が職業上の尊厳と身分の存亡を掛けて、闘い獲った制度なのだ。しかも不断の研鑽によって、内容的な向上が図られなければ、制度の維持は期し難い。米国の大学図書館における自己評価の例を批判的に検討することから、学ぶべきは何かを考えようというのが、この報告の主旨である。

2.マンデリノ図書館(Manderino Library, Calif. of Pennsylvania)が評価の対象とされた経過について

アメリカにおける1990年代は、レポートの時代と言っても過言ではないくらいで、特に大学や各種の研究機関には、ありとあらゆる報告があふれ返っていた。例えば、プログラム・レビュー、アクレディテーション・レビュー、短期や長期の計画文書、ニーズ・アセスメント、達成度アセスメント、ユーザー・サーベイ、ニーズ・サーベイ、オートメーション計画、人的分析等々の無数の報告がそれである。したがって、図書館員や大学の研究者は、本来、専門職の職責上からも当然果たすべき義務として、受け入れてはいるものの余りに過大すぎる負担に、不満がでるほどであった。そのような背景があつて1987年に、State System of Higher Education's (SSHE) Board of Governors から、徹底した自己評価の要請があった時、マンデリノ図書館における図書館員の反応がいずれかと言えば、否定的、懐疑的であったのも無理からぬものがあった。本当に必要な調査なのか？調査が完成しても、果たして読む人があるのか？何より、図書館にどういう効果をもたらすのか？

当時の状況は、仮にSSHEとの協議が不調に終わって、調査に着手しないという結論になつても、他の2つの団体、Middle States of Colleges and Schools と National Council for the Accreditation of Teacher Educationから、同様の要請が来るには、確実に予測されていた。結論を言ってしまえば、彼等は決然として、この挑戦を受け入れ、完全な調査をやり遂げた。彼等は、それを一石三鳥の勝利と形容している。18ヶ月の長きにわたる自己評価のプロセスと苦闘の果てに得られた最終報告は、各資格認定機関から求められた大学報告中に必要とされるManderino Library に関する報告の基幹部分に相当するものであった。

Manderino Library の図書館職員とその関係者が創りだした自己評価のプログラムは、単に調査事項や図版や図表を満載した要約ではない。わが図書館ファミリーの各メンバーの創造的な思想と貢献に満ちていると彼等は言う。即ち、図書館活動に関する、全ての側面についての包括的、かつ内省的な蓄積が、彼等が現になしつつあること、なすべきことの真実を否応なく語っていると。。。彼等は、すでに本来の「割り当て仕事」の枠を超えて、調査結果を図書館活動の大小の局面を組み直すために、使い始めている。彼等の丹精こめた調査結果は、図書館活動の骨格として、チェック・アンド・バランス・システムとして、また比較的規準として機能する構造を所有したことになる。従って、彼等の創造になる自己評価の方法は、その必要がある時は、創造的な改編を許容するものであるが、周到に調査された結果の概要を〔応用的に〕利用することの価値を明らかにしたことになる。中規模サイズの生きた図書館組織の評価に、この種の調査が有効であり、その経験が共有されることで、より有効に生かされることを彼等は期待している。

3. 大学と図書館の概要

Calif. Univ. of Pennsylvania(CUP) は、公共的、地域的な州立の大学でカリフォルニアの南西部にあり、Pennsylvania's State of Higher Education を構成する14の機関の一つである。学生数 6,748名、教員数 290名で College of Education and Human Services, Liberal Arts, Science and Technology および The School of Graduate Studies and Researchに所属している。

中規模の大学図書館の主たる役割は、大学の講義科目を支援することであり、レファレンス、相互貸借、オンライン検索、教員および学生を対象とする書誌指導に関するサービスを提供することにある。12年を経過した建物の中に、31万冊の図書、1,700種の購入雑誌、63,000点の視聴覚資料および120万点のマイクロ形態資料を所蔵している。SSHEに所属する大学中で最大規模の図書館で、ペンシルバニア州の公文書および1986年以降は、アメリカ合衆国の公文書をも所蔵している。資料の貸出は、年間152,834点。TEXTREIVE (software)を使ったオンライン目録は、内部のオンライン貸出システムに接続している。またCD-ROM版による9種類のインデックスを、購入し利用に供している。

スタッフの構成は、図書館サービス担当のディーン=1人、システム・アナリスト=1人、専門職員=10人、事務職員(非専門職員)=15人、アシスタント(大学院生)=フルタイム換算で6人、アシスタント(学部学生)=80~100人からなる。

1990年の予算は、総額170万ドル、総額の3分の1を資料費と運営経費に割り当てる。組合員の構成は、年間9箇月契約のスタッフと年間12箇月契約のスタッフの2本立てであり、当然、労働協約から生ずる制約は、所属する組合毎に異なるため、2重の配慮と思考

が必要となる。以上のような条件下に、図書館評価のための調査・研究は、実行された。

4. サポート・プログラムを評価するための規準について

SSHEは、自身の発行した文書の中で、「大学は、教員のためのサポート・プログラムと学生のためのものと2通りの規準を持つ必要がある」と述べている。評価の中には、サービスの対象となるユーザーからの質的フィードバックや対費用効果に関するデータ、大学の他の分野と関連する部分の有効性についての評価も含まれる。

SSHEからの要請を受けてから2箇月後、大学図書館の自己評価に関するワークショップがRutgers 大学で開催され、ディーンと別に一人の図書館スタッフが参加する機会が得られた。そこで得られた情報によって、大学図書館の評価にとって、Antoinette Kaniaのモデルが認定を目的とした質的規準と、自己評価を目的とする量的な業務達成指標を示唆する点で、優れたものであることが判明した。

5. 自己評価に着手する

1988年1月、マンデリノ図書館の全ての被雇用者は、調査の関連資料とカニアの方法に関する資料を受け取る。2回にわたる集会でカニア・モデルを使用して、図書館でやっていること、なすべきことを分析することの有効性と合理性について説明。全ての図書館職員が必要な場所で、有効な改革を行うこと、それが全ての図書館職員に利益をもたらすことを丁寧に説明した。その結果、開かれた討論の場で、これまで試みられたことのないカニア・モデルの有効性を認め、受け入れることを決定した。「完全かつオープンなコミュニケーションの有無が自己評価の成否を左右する。」

図書館の管理者は、スタッフを熟知し、2つの異なる労働協約という制約の下で、有效地に接する方法をよく知っていた。スタッフの不安を除くために、細部についてまで十分に説明し、スタッフ間の融和をはかった。その結果、導入過程で、ほぼ8割程度のスタッフは、調査の理念を受け入れた。ディーンは、委員会のメンバーの構成にバランスを持たせる配慮を怠らなかった。例えば、気質の面で互いに補い合う者、労働における倫理意識に富む者、能力、資格、ベテランと新人、内部の委員と外部の委員等々。また、ディーンはスタッフと個別に自己評価に関して、話し合いをもち、さらに数週間を費やして、最悪のシナリオを想定し、それをいかに克服すべきかを考えた。その結果、ディーンは、以下のように組織を構成した。全てのスタッフを4グループに分け、どのグループにも教員とスタッフがいて、同時にサービス部門と整理部門の双方のスタッフが含まれる。ミーティングは、グループ別に持たれ、各グループはリーダーと記録係を選出し、図書館の長所と弱点、問題点を列挙し、討議する。1時間後に、全部のグループが集合し、4グループの記録係が討議内容を口頭で報告し板書する。最後にディーンが報告についての感想を述べ、その内容も併せて板書される。板書された各グループの討議内容は、別々の場でなされたのに、殆ど同じ内容であり、誰もが同じ問題意識を持っていることに驚くとともに、互いが連帯感をもち、自己評価への熱意も生まれてきた。報告内容の要約はタイプされ、全てのスタッフに配布された。厳しい労働協約という環境のなかで、自己評価がなされる過程では、以下にあげる事項の大切さは、いくら強調しても強調し足りないくらいである。すなわち、① 全てのスタッフが参加すること。② 勧告、推薦は図書館の全システムを通して、平等な方法で成されること。（差別的、選別的でない）③ いったん自己評価過程が完成したら、その報告と戦略プランは、棚ざらしになったり、無視されたりすることな

く、実践されなければならない。④ 全てを調査する過程において、何人も不安を感じることがないこと。この過程がスタッフの待遇切り下げのための秘密機関の調査ではないことを知らせる。

6. 自己評価運営委員会(Self-Study Steering Committee=SSC) の結成

ディーンは3人の専門職員、2人のサポートスタッフ、1人の大学院生、1人の学部学生の合計7人で構成される運営委員会のメンバーを任命した。大部分のメンバーは、これまでのミーティングのリーダーもしくは、記録係であった。議長に指名されたのは、書誌指導(bibliographic instruction)を担当する、マンデリノ図書館での経験は、わずか1年という女性スタッフであった。しかし、資質についてみると、彼女は新鮮な概観を持ち別の図書館では、14年間にわたって主任カタログラーの任にあった。彼女は自己評価過程を指導するにあたって、運用、整理の両部門の観点から均等に目配りした。加えて、彼女は卓越した組織力、対人関係、コミュニケーション技術の持ち主としてよく知られている。それらの要素は、当然、自己評価の過程を指導する際、信頼できる管理スタイルに反映される。ディーンは、委員会に命じて、図書館の短所、長所について評価し、全てのスタッフが参加できる評価のための枠組みを開発させた。委員会は直ちに自己評価のために、カニアのモデルを採用することを決定、1988年の春期の学期の間、毎週、集まりを持った。そこでは、各委員がそれぞれカニアの5つのポイントからなる概要を調査した。即ち、目標に関する規準、蔵書規準、アクセス／利用規準、人的規準、管理規準の5つである。さらにカニアの規準に沿って、各委員が「調査レポーター」の役割を想定しながら、繰り返し質問し、最終的に全ての図書館スタッフに話かける結果になった。このクロス・チェックの方法を使って調査し、事実を確認する過程で図書館の現在の運営と歴史についていくつかの興味深い事実を発見することになった。彼等は、マンデリノ図書館が多くの分野において水準を凌駕していることを知り得たものの、いくつかの他の分野で、改編が必要であり、そのためにより詳しい調査をする必要があることが明らかになった。

7. 調査報告の完成とその後の取り組み

カニアのモデルを使って、調査と分析を重ね、SSCとも協議した結果、14項目からなる図書館活動に関する勧告が成立した。マンデリノ図書館の水準が多くの点でカニアの規準を超えていたことは、先に述べた通りであるが、彼等は同時に困ったことに、最も基本的な欠くことのできない事項のなかに、改善を要する項目を文書の形式で、確認しないわけにはいかなかった。彼等は、いずれかと言えば、努力項目に属する部分で相当程度の成績をあげているのに、必須項目の幾つかを無意識のうちに手抜きしていたことになる。

ディーンは、SSCの勧告に同意し、改善項目の具体的な検討のために以下の小委員会を組織した。即ち、①目標に関する小委員会 ②蔵書規準委員会 ③オートメーション小委員会 ④逐刊物小委員会 ⑤メディア・サービス小委員会 ⑥利用者調査小委員会 ⑦コミュニケーション小委員会 ⑧現職教育訓練小委員会 ⑨組織図小委員会の9つである。

それに加えて、運用、整理の両部門の調整者、書誌指導担当の専門職員、ディーンの三者が彼等に対してなされた勧告の研究に取り組むことに同意した。これらの小委員会は、SSCやディーンから独立して作業を進めた。しかし、小委員会相互の意志疎通には、留意し、会合の内容は詳細な議事録として、SSCの議長とディーンに配布し、スタッフ・ラウンジの掲示板に掲示した。小委員会は頻繁にSSCのアドバイスを求め、必要な場合には、

出席を求めた。ディーンは、各小委員会の進行に気を配り、遅れている場合は、注意することもあった。幾つかの失敗もあった。例えば、小委員会の検討を受けて、直ちに実施された企画に、殆ど人が集まらず、結局、中止されたり、最初のうちは、参加者が多かった企画も、潮が引くように、集まる人が減って、自然消滅したこともあった。

失敗を通じて、カニアのモデルをそのままの形で評価の規準としないで、最小限の必要な改編は必要であると判断した。しかし、カニアの評価のポイントは、一つとして除外することはしなかった。外部機関でなされる評価に満足すべき対応をするためには、全てが必要だというのが、彼等の判断であった。長期にわたる調査と検討の過程を通じて、一番彼等の印象に残ったのは、コミュニケーションの大切さということである。過剰なまでの情報があるとき、彼等は多くの議事録を読まなければならない不満を口にした。何か読み落とすのではないかと不安だったのである。全ての人に、全ての事を伝えることに飽きてきた面もあるが、それは、やり始めるとやらずにおれない習慣として身につき、有効でもあった。誰もがタイプをたたき、コピーをつくり、メイルボックスに資料を山積みした。

11グループに属する全てのスタッフが全員、定期的に議事録を作り、全ての人に配布したのである。勿論、議事録が配布されたから、全てが周知されたわけではない。大部分の組織がそうであるように、いかに読ませるかという難題が生じたのである。しかし、これは時が解決してくれた。新しい局面が展開するにつれて、興味が深まり、のめりこんでゆくようになったからである。勿論、同僚のプレッシャーも強くて、いつまでも「分かりません」という言い訳ばかり続けておれない事情もあった。

調査は最終的に300ページにわたる報告書として、SSCに提出された。報告の提出が完了すると同時に、ディーンは、彼等に改善を実現するための5年計画の作成を命じた。

彼等は本当のところ、疲れきっていたので断りたかったのだが、結局のところ、それもやり遂げた。全てのスタッフが参加し、図書館の全てが変わった。調査の結果を受けて弱点である逐刊部門に専門のスタッフが一人、増員配置されたことは、スタッフの意識が全く新たに変革されたことに較べれば、取るに足りないことと言うべきかも知れない。

8. おわりに

マンデリノ図書館における自己評価の試みは、図書館活動の全分野を網羅している点で米国においても、他に殆ど例がない。調査の過程に図書館の全てのスタッフを参加させ、苦しく、忍耐のいる作業過程を最後は、むしろ自己変革を遂げたことからくる喜びをもって、しめくくっている。それが報告の読者にも感動をあたえる根拠となっている。手法の新しさが問題なのではなく、必要なのは、徹底した民主主義だという平凡な結論である。

今回の報告は、カニアのモデルにまで、踏み込んで分析するだけの準備ができず、調査のプロセスを中心に置かざるを得なかった。その意味で極めて、不十分な報告にとどまるが、カニアのモデルそのものについての検討は、今後の継続課題としておきたい。報告は一例に過ぎないし、日米の大学や大学図書館に係わる制度の相違の大きさを考えると機械的な評価規準の適用は到底不可能であるが、検討に値することは確かである。なお、もとの論文の著者、論文名、掲載雑誌等のデータは、下記の通りである。

The process and value of self-study in a medium-sized library / William L. Back and Marsha L. Nolf Collge & Research Libraries. v.53, no. 2 p. 150-162
(京都大学医学図書館)